

宮崎のこどもと表現運動 (その1)

—— 高千穂のこどもと神楽 ——

高橋 るみ子・日高 知子*・三好 涼子*・吉川 京子*

Children in Miyazaki and Movement Expression

—— Children in Takachiho and KAGURA ——

Rumiko TAKAHASHI and Tomoko HIDAKA*

Ryoko MIYOSHI*・Kyoko YOSHIKAWA*

1 研究の目的

からだをひらき、心をひらく、“表現の世界”の青少年期における体験は、人間の発達の重要な時期であるこの期を充実させるだけでなく、やがて来る美しい運動の文化の意味や、人間を活性化する表現をより深く理解する時期に備えることにつながる¹⁾。松本千代栄は、人間と舞踊の限りない出会いに着目し、non-verbalな表現と伝達の世界に、こどもたちの自他を輝かし表現のよろこびを拓きたいと希って²⁾『こどもと教師とでひらく表現の世界』を著し、一貫して「二度とは立ちかえれないこども時代の必須の人間体験としての表現運動³⁾」の重要性を説いている。また、この『こどもと教師とでひらく表現の世界』の中に収められた約300枚の写真は、こどもたちの身体表現をとらえ、その表情やからだは、見るものに、この時期のすべてのこどもにとって表現運動は必須の体験であることを納得させる。

一方、踊りの本質(人間の生きる節々に、その祝祭性の核となって、人間の生命の火をもやしつつ、生命を強化し、時代と階層と人々の好みのままに生成された表現⁴⁾)を考えると、地域に生きる文化としての表現をその地域のこどもに体験させることも、前述の書で報告されているさまざまな実践と等しく重要であることに気づかされる。そこで本研究は、地域に生きる文化とかわった(cross-culture)表現学習の実践を目的に、宮崎県のこどもの表現運動を探る実践研究の一として、まず、全国的にも有名な「高千穂夜神楽」を有する「高千穂のこどもの表現運動」について新たな提案を行おうとするものである。

2 研究の方法

風土の表現としてはぐくまれた高千穂夜神楽が、現代とのかかわりの中でどのように踊り、楽しまれ、観られているか。比較的昔のままを伝えていると言われる下野地区の夜神楽『下野

神楽』を中心に、高千穂夜神楽について、文献による情報収集と、文化人類学や民俗学の手法を参考に現地調査を行った。続いて、この下野地区の小学生が通学する上野小学校の5年生・6年生全員に、高千穂夜神楽について“どのような知識を持ち”，高千穂夜神楽と“どのようにかかわっているか”調査用紙⁵⁾によるアンケートを行った。

(現地調査)

- ① '91年10月 2日 第1回聞き取り調査 (高千穂神社宮司・後藤俊彦氏)
- ② '91年11月22・23日 下野地区の夜神楽「下野神楽」の鑑賞
第2回聞き取り調査 (下野地区の神楽宿主人・戸高福一氏)
- ③ '91年12月 9日 第3回聞き取り調査 (八幡神社宮司・興梶弥寿彦氏)
高千穂役場にて資料収集
- ④ '91年12月16～18日 第4回聞き取り調査 (下野地区のホシャ17名)
上野小学校の5年生・6年生を対象としたアンケートの実施
- ⑤ '92年 1月27日 第5回聞き取り調査 (下野地区のホシャ17名, 興梶昌彦氏)

以上の調査で得られた結果と考察をもとに、「高千穂のこどもの表現運動」について、神楽とのかかわりから授業実践につながる提案を行う。

3 結果と考察

(1) 現代と高千穂夜神楽

文化的・経済的な価値をもつ高千穂夜神楽

「日本のふるさと・山狭のまち高千穂へようこそ」といった見出しで始まる高千穂町観光協会のパンフレットには、高千穂夜神楽(岩戸神楽)の簡単な説明と、「観光神楽」として高千穂神社と岩戸神社で毎晩奉納される4番の舞——『手力雄の舞』(たちからおのまい), 『細女の舞』(うずめのまい), 『戸取の舞』(ととりのまい), 『御神舂の舞』(ごしんたいのまい)——の解説が記されている。「観光神楽」は、夜神楽のシーズンオフに高千穂を訪れる観光客のために、『33番の舞』の中でも客受けのする“神面”をつけた上記の4番を、各地区の舞人=ホシャが交替で毎日1時間舞うものである。“神楽宿”で舞われる夜神楽とは本質的に異なる(下野地区のホシャ佐藤忠一氏の言)が、それでも拝観料300円を払って鑑賞する観光客は多く、各地区の舞人=ホシャたちが地域の経済開発に一役買う形で協力している。

この「観光神楽」の存在が語るように、昭和53年5月22日に国の重要無形民族文化財の指定を受けたことで、高千穂夜神楽は、高千穂の人々にとって“文化的な価値”と同時に“経済的な価値”を持つ存在になった。けれど文化財の指定は、高千穂の人々に、我が町の高千穂夜神楽をなくしてはならない、いかに伝えていくべきか、といった伝承の問題も残した。

一方、文化財の指定を機に、近年さまざまなイベントから参加の要請がある。例えば、'80年の『ヨーロッパ国際伝統芸術祭』、'89年の『ユーロパリア'89 JAPAN』に浅ヶ部地区が参加している。さらに'90年の9月に、山本寛齋のプロデュースによる『ROCK FRONT—天・地・水』が高千穂町で開催された。その様子を多くの新聞やテレビが報じ、1990.9.24の宮崎日日新聞も次のように取り上げている。「県内外から1万数千人の観光客が高千穂を



観光神楽
『手力雄(たちからお)』の舞



観光神楽
『細女(うずめ)』の舞



『下野神楽』
神楽宿(内注連)のようす

訪れ、町民を巻き込んでの“現代版岩戸開き”のショーを楽しんだ・・・町をあげて参加し、興奮し、酔いしれた『ROCK FRONT-天・地・水』は、現代の“まつり”として高千穂町の人々に受け入れられた⁶⁾と。中でも町内の100名余のホシヤが舞った『みちゆき神楽』は「おおいにこのショーを盛り上げた⁶⁾」とのことである。

こうしたイベントへの参加・招へいは、高千穂夜神楽はもちろん高千穂町を広く内外に紹介することになり、人口流出が続いていた高千穂町のUターン現象や、近年盛んに行われている村おこしに大きな影響を与えた⁷⁾。

村まつり・神事としての価値

高千穂神社の宮司である後藤俊彦氏は、その著『高千穂夜神楽』において、「高千穂の夜神楽は単に儀式としての“カミアソビ”や“タマシズメ”ではなく、村人が臨機応変に俳優人(わざおぎびと)になって奉仕する、生活史に欠くべからざる年中行事のひとつであり、農耕と神事、実生活と祭りが同次元で結び付き、繰り返されていく神事儀礼である」と定義し、「神楽が村の“おこない”としての“まつり”によって成就に至る」と述べている。このように以前の高千穂夜神楽は、神楽に直接かかわる“おやけ”と呼ばれる男達(元締め=村の長老、なかぜ=世話係り、神使われ=賄い方、注連の番=警備役、水部=水の管理、奉仕者(ほしや)=舞い手・楽人)のみでなく、それぞれの地区が一体となってその地区の夜神楽を支えていた。

しかし30年程前から高千穂町は人口が流出し専業農家が減少した。また経済の高度成長に伴い町民の職業も多様化した。こうして高千穂町は住宅地的な色彩が強まり、「今年不作だったら来年豊作になるように神楽を舞い、神様を呼んで祝って、捧げ物をみんなで食べて、神様にも食べていただいて帰っていただく・・・」(八幡神社の興柁宮司の言)といった農耕と神事の結び付きは、共同体的な意識と共に薄れ、高千穂神楽はさまざまな面で変化を余儀なくされた。以下どのようなことが原因となって、どのような変化が生じ、夜神楽の村まつり・神事としての価値が薄れてしまったのか、具体的に記す。

1. 開催地区と期日

昭和の初期には高千穂の50を越える地区で行われていた夜神楽も、平成3年度は22の地区に減少した。また近年は、11月22日の新嘗祭に行う下野地区、12月16日に行う浅ヶ部地区、1月14日に行う向山地区の3地区以外は、11月22日から翌年の2月10日にかけて、地区の人々の都合や観光客にあわせた週末に行うようになっている。

2. 神楽宿

昔は、「たとえ家の補強をしたり、畳替えをしたり大変な出費となっても自分の家が神楽宿になることを誇りにしていた」、「来年こそは我が家に氏神様を」と神楽宿を希望する民家も多く、抽選が行われた⁸⁾。現在は地区内の家が順番に神楽宿を引き受ける。しかし費用のかかる神楽宿の引き受け手がない地区もあり、平成3年度は、5つの地区が、地区の公民館を使用して夜神楽を、あるいは「日神楽」(夜神楽を全体的に縮め簡略化したもの)を行っている。

観光も以前は顔見知りの村人がほとんどであったと思われる。対し現在は観光客が多い。11月22・23日に下野地区の夜神楽が行われた戸高福一家には、仮設の客の座やトイレ、駐車場の準備、マイクの設置等、観光客のための設備が多々用意されていた。

3. 夜神楽の型式と舞い

夕方4時前後の『神迎え』から、『舞い入れ』、『神庭固め（夜神楽祭り）』、『御神屋始』（みこおやはじめ）と続き、7時過ぎには『33番の舞い』が始まる。翌日の正午前後に舞い終り、片付け、真会で神楽が終わる。そして午後3時の『神送り』（神楽宿から鎮守の森に神様をお送りする）で夜神楽は終了する。この夜神楽の型式も、観光客が退屈するといった理由で『神庭固め』の折りの一部が省略されたり、『神迎え』に向いた鎮守の森で行っていた“餅まき”を、観光客が多い時間帯に舞う『五穀の舞い』の際に行うなど、観光客にあわせた配慮・変化が見られる。

また、さびしい『戸立て神楽』がなくなり、『日神楽』においては、『宵殿7番』と呼ばれる1番から7番までで済ませたり、『式3番』と呼ばれる『神降し』、『鎮守』、『杉登り』の奉納で終わるところもある。それぞれの舞についても、興杵弥寿彦宮司は、「自分の悩みを訴えて舞った昔に比べ、最近では舞い方が静かになっている」と述べている。前述の「観光神楽」も、繰り返しの部分を省略（16方向から8方向へ）する、いわゆる観光用の舞い方がなされている。

4. その他

・ 女人禁制

「もとは女性も舞う出雲系の里神楽であった高千穂夜神楽は、山伏が神楽を舞う頃から女人禁制がたてまえとなり、台所役から配膳、接待など、すべて手慣れぬ男たちの手ですすめられた⁹⁾。最近では炊事などの裏方はすべて女性が行っている。さらに、神様を呼ぶ清浄な場所であり、神楽を舞っているときは神様であるホシヤが控える“内注連”の中さえも、観光客の増加で手狭となった近年は女性が通過している。加えて後継者難を理由に、神様であるホシヤでさえも「女子中学生にさせてみたい」との声が出ていた。

・ 奉仕者

一方、“ホシヤ”という呼び方も、興杵弥寿彦氏の説明では、「昔は子どもが生まれた家で、その子どもがすくすくと育つようにとの願いから神楽を舞ってもらい、その舞人のことを願祝子（がんばり）と呼んでいた・・・この願祝子（がんばり）が、ホリドン、ホシヤドン、ホシヤと変化したものである」ところが今では「ホシヤ=祝子という意味がホシヤ=奉仕する者というふうになり、ホシヤ自身も自らを神様に奉仕するものであると考えている」とのことであった。

・ 神楽せりと若者

ホシヤ甲斐邦茂、江藤祐司両氏の言によれば、「お酒を飲んだ6～7名の若者が、一団となって肩を組み輪になり、『夜神楽せり唄』を歌いながらほかの一団と激しくぶつかり合う神楽せりは、若者が少なくなったことや、車社会の発達に伴う飲酒運転の禁止などが原因で消滅した」。文献『高千穂の夜神楽』にも、「霜夜の寒さも厭わず、10キロ、20キロの道を遠しとせず、若人たちは神楽宿めざして集まり来ますが、最近ではほとんど車で訪れます」と若者の変化が記されている。

以上、夜神楽の価値の変遷から現代の高千穂夜神楽の実態を探ってきた。最後に高千穂の人々の価値観の変化にあわせるように変化した夜神楽について、身をもって実感している興杵弥寿彦宮司と「下野神楽」のホシヤたちが語った夜神楽の将来を記してこの項を終る。

「神楽は高千穂にずっと残さなければならない、これがなくなったら高千穂もなくなる」

(興杵弥寿彦)

「神楽はこれから変わっていくと思うが、舞いは変わってはいけない」(田崎朋美62才)

「多少は変わる、テンポとかは変わらない。できるだけそのままに残したい」(大賀誠17才)

「祈りを忘れずに自然に帰ることを考えていれば大きく変わることはない」(興杵弥寿彦)

「舞い続けないとしょうがない」(甲斐邦茂62才)

「あとがないので舞い続ける」(江藤祐司37才)

「ずっと神楽を伝承し続けたい、神楽を好きな人がたくさんいるから」(広木哲也18才)

「人が見ていればどこでも舞う、知ってもらいたいから」(江藤利彦18才)

「国外にも行って見たい、世界の人に神楽を知らせたい」(佐藤剛17才)

(2) 上野小学校のこどもたちと神楽

上野地区・下野地区の子供が通う高千穂町立上野小学校は、児童数約 200名の小規模校である。質問紙によるアンケート調査の対象は、5・6年生計84名(男子39名・女子45名)である。以下、13項目に対する概要を記す。

- ・ こどもたちは、神楽を練習したり舞ったりした経験はないが、1名以外はみな夜神楽を観たことがある。調査を行った12月18日は、その年の夜神楽が始まって約1ヶ月を過ぎた頃であったが、既に70%に近い57名が観ていた。しかし夜神楽を観たことはあるがテレビでしか見ていない子もいる。高千穂に住みながら15名の子は、神楽宿での夜神楽を観たことがない。
- ・ こどもたちの70%が、夜神楽はおもしろい、楽しいと感じていた。何が楽しい?との問いに対し、「舞」あるいは「笛や太鼓」「面」等、“舞”に付随するものをあげたこどもが多い。しかし「餅まき」や「ふるまわれるごちそう」「みんなでさわぐ」「夜ふかしができる」など、“まつり”としての夜神楽に魅力を感じている子はさらに多い。
一方「親が行くから」「無理やり行かされた」子は、「つまらない」「退屈」「意味がわからない」「人が多すぎて」などの理由をあげ、夜神楽はおもしろくないと答えている。
- ・ 95%のこどもは、高千穂の夜神楽は有名だと思っている。理由として「よくテレビにでるから」「観光客が多いから」が多い。「伝統」「先生が外国にまで伝わっていると言ったから」「文化財だから」のような夜神楽に対する知識からの回答は少ない。
- ・ 夜神楽の目的も「神様のお祭り」「豊作を感謝する」と答えた子は40%、対し「伝統だから」と答えた子は10%弱、「観光客のため」と答えた子も10%弱、わからない子も6名いる。
- ・ 観光客に対し、女子は「有名になるから」「有名にしたいから」と観光客が来ることを歓迎している。しかし男子の中には「混雑する」「見る場所がなくなる」から来ないほうがよいと思っている子も30%弱いる。
- ・ 夜神楽の将来に対し、90%の子は「なくなる」と思っているが、10%の子は「人がいなくなる」「若い人が踊らない」のでなくなると思っている。「なくなる」と思っている子も、「伝統的なものだから」「次々受け継がれていけば残る」「残ってほしい」と、

伝承されなければ残らないと考えている。

- ・ 将来舞いたいと思っている子は、男子半数、女子は5名である。「つまらない」「めんどくさい」「難しい」「恥ずかしい」が舞いたくない主な理由である。10名の女子は、「女の人は舞ったらいけないから」「女の人で舞う人がいないから」を理由としている。しかし「どうして女の子は舞えないの」と疑問に感じている子も数名いる。

アンケートの結果から、「テレビにもよく取り上げられるし、観光客も多いから有名」な夜神楽に対し、「舞もまあおもしろいけれど、地区の“おまつり”だからおもしろい」「あまり詳しくはわからないけれど、伝統があり、伝承しなければいけないものだ」「でもつまらないし、めんどくさいので自分はやりたくない」と感じているこどもたちの姿が見えてくる。しかし既にホシャとして舞っている高校生も、「親に連れられて行ったが、神楽はあまり見ていない」「小さい頃は舞おうと思っていたが、師匠さん（地区の最年長ホシャ）に勧められて舞い始め、ずっと続けたい」と考えている。同様にこどもの頃は神楽に興味がなく「人が集まるのが楽しみで」「遊んだり食べたりするのを楽しみに」していた中年のホシャたちも、20才前後には“舞”に興味を持ち、自分から希望して舞い始めていた。このホシャの体験談から、「つまらないし、めんどくさいので自分はやりたくない」と感じている今のこどもたちも、きっかけさえあれば、ホシャとして舞い始めると考えられる。

一方、夜神楽に対しこのように考えているこどもたちも、前述の山本寛斎のプロデュースによる『ROCK FRONT-天・地・水』に対しては、「すごかった」「おもしろい」「楽しかった」「派手」「迫力があり神楽もすごい」「かっこいい」「やってみたい」「高千穂とは思えない」などの感想を述べている。そしてこれらの感想は、「もっとおもしろく」「もっと賑やかに」「もっと短く」「もっと迫力のある舞に」「見ている人が楽しくなるように」、そうすれば「もっと有名に」「もっとたくさんの人に来てもらえる」という、アンケートの回答に現れた、こどもたちの夜神楽の対する要求と重なっている。

以上のことから、次の2点が神楽とのかかわりの中で表現運動を考える際のポイントであると考えられる。

- ・ 今のこどもたちも“きっかけ”（楽しい表現運動としての高千穂夜神楽の体験）があれば、いつかホシャとして舞い始める。
- ・ こどもの要求にあわせて教材化するには、「もっとおもしろく」「もっと賑やかに」「もっと短く」「もっと迫力のある舞に」「見ている人が楽しくなるように」高千穂夜神楽のエキスを抜き出す。

（3）地域に生きる文化とかかわる表現学習

現在高千穂町では、学校教育の一環として、田原小学校・上岩戸小学校・岩戸小学校・向山南小学校・高千穂中学校・向山中学校・上野中学校の6校で神楽が“舞われて”いる。対して下野地区では、「教えて」という子や、「お父さん、お兄さんがするので」という子が舞の練習に参加している。このようなこどもたちに対し、八幡神社の興招弥寿彦宮司は、「神楽を覚えるのは根気がある・・・やる気のある子どもがいいが、向き不向きがあり、脱落者も多い・・・

子どもは覚えると忘れないので小学校5・6年生から始めるとよい」と述べている。

この神楽の舞えるこどもの養成、夜神楽の後継者としての育成に対し、今回提案する体育科教育としての表現運動は、イメージ課題「夜神楽」から、①イメージをひろげ ②ひろげたイメージから動きを引きだし ③自分の動きとして踊る、学習である。よって発達の特性を以下のようにおさえることとする。

低学年・・・「夜神楽」の特徴を大づかみに、リズムカルに表現する。

中学年・・・友だちといっしょに、特徴のある動きで、「夜神楽」を表現する。

高学年・・・「夜神楽」のいろいろな状態をとらえ、動と静の対比や集団を変えて、くわしく表す。

「夜神楽はこうやった方がいいと思っても、伝統できているから変えられない」と高校生のホシャ佐藤剛君が言うように、夜神楽そのものはそう簡単に変えることはできない。がここで提案する学習は、こどもたちがそれぞれがもっている夜神楽のイメージから表現を引き出すものであることから、「もっとおもしろく」「もっと賑やかに」「もっと短く」「もっと迫力のある舞に」「見ている人が楽しくなるように」、といったこどもたちの願いを十分かなえることができる。さらにこの学習の前には、例示のような他教科とのかかわりから学習の準備を行い、こどもたちのイメージをよりいっそう広げる活動も必要であろう。

- ・発達にあわせ、「高千穂夜神楽」の歴史、目的、形式と内容などを学習する。
- ・ホシャから「夜神楽」について体験を聞く。
- ・神楽宿を訪ね、ひとりひとりが「夜神楽」を実感する。
- ・「夜神楽」のようすを絵に描く、作文を書く。
- ・面や衣装をまねて制作する。
- ・笛や太鼓を使って神楽の音楽を演奏してみる。

このような学習の準備の後、本論の結論とも言える以下の授業実践に取り組む。とくに高学年は、毎時間の学習内容を生かして運動会の作品につなげることも可能である。従来の、練習を重ねて夜神楽の舞を披露した運動会での発表とはまた異なる評価を得ると期待している。

以上、全国的にも有名な高千穂夜神楽を有する「高千穂のこどもの表現運動」について、地域に生きる文化とかかわった表現学習をこどもたちに体験させることを目的に、高千穂夜神楽のもつ価値の変遷から現代の高千穂夜神楽をとらえ、現代の高千穂夜神楽と高千穂のこどもたちとのかかわりから上記の学習を提案した。そして実際にこの学習内容が高千穂のこどもたちの表現要求を満たすものになるか、できる限り早い時期に検証する機会をもち、報告したいと考える。この高千穂夜神楽を“まるごと学習する体験”が、高千穂のこどもたちの内的な動機となり、「なぜ文化財を守るのか」、「なぜ神楽を伝承しなければならないのか」、をひとりひとりのこどもが認識し、将来に続くこどもと高千穂夜神楽との良い関係につながることを願うとともに、研究に協力してくださった多くの方々に感謝の意を表したい。

4 結論にかえて

高千穂のこどものための表現運動指導案

I 低学年の指導案－2例－

①『神さまをむかえに行こう』（20分）

(1) ねらい

- ・イメージをもって動く。 ・自分でみつけて動く。

(2) 指導の手順

・ウォーミングアップ

先生といっしょに、神楽のリズムにあわせて、手振りから全身の動きへ。
友だちと大きな太鼓をたたき、鈴をふる、身体をたたく。

・『神さまをむかえに行こう』

「神楽宿のかざりつけを ・はたきや掃除機を使っておそうじだ
しょう」 ・紙かざりを切って飾ろう（山、雲、花、動物）

「さあ！おはらいだ」

- ・前後左右、高い所も低い所もおはらいだ
- ・友だちと互いに、おはらいする人とされるものになって動く。

「神社まで行列だ！」

- ・4人で列をつくって歩こう、途中で何がある？（おじぞうさま、川、のぼり坂、くだり坂、向こうからバイクだ）
- ・夕立だ、急げ！
- ・到着、神さまにお参りしよう。

②『ほくも私も、こどもホシャだ』（20分）

(1) ねらい

- ・いろいろな動きをリズムカルに動く。 ・友だちとかかわって動く。

(2) 指導の手順

・ウォーミングアップ

先生といっしょに、神楽のリズムにあわせて歩く、跳ぶ、回る。
友だちのまねをして走る、跳ぶ、回る。

・『ほくも私も、こどもホシャだ』

「刀をもって踊る」 (木を切る、空を切る、×に切る、刀を回して踊る)

「足音をたてずに、細かい (大きく四角を描いて、前へ後ろへ、8の字を描いて)
歩幅で移動しよう」

「神さまはどこにいるかな
踊りながらさがそう」

- ・あちこちさがそう、のぞいてみよう、呼んでみよう。（マットの下、草の中、天井、水の中）
- ・ひとりでさがそう、友だちといっしょにさがそう。

「神さま、みつけた！」

- ・うれしい踊りはどんな踊り？（ピョンピョンは

- ねる、大きなシャンブ、友だちと手をたたく)
- ・友だちのうれしい踊りもまねして踊ろう。
 - ・みんなで次々うれしい踊りの見せあいをしよう。

Ⅱ 中学年の指導計画例

- (1) 題材・・・『はくらの夜神楽をつくろう!』
- (2) ねらい・・・身近な題材である「夜神楽」から、精一杯動けるもの、おもしろそうなものを選び、特徴をとらえた自分たちの動きで表現する。
- (3) 時間・・・3時間

<表1>

No.	課題	時間	学習内容	指導のポイント
1	跳んで跳んで回って... 踊る	30×1	<ul style="list-style-type: none"> ・「ゆっくりゆっくりトントコトコトントントン」－「だんだん速くトントコトコトントントン」 ・「みんなで回る・円になって回る」－「ひとりでも回って踊る」 	<ul style="list-style-type: none"> ・重心を低くして両足で跳ぶ、軽やかに片足で跳ぶ。 ・首ふり、手ぶりをまじえて。 ・2人の動きを互いにまねて続けて踊らせる。
2	聞こえてきたぞ、笛・太鼓ノ	30×1	<ul style="list-style-type: none"> ・夜神楽の太鼓のリズムを出し合う(手拍子) ・いろいろなリズムにのって太鼓をたたく ・一人づつ順に、みんなで一緒に ・笛、手拍子、鈴とのかけ合いだ 	<ul style="list-style-type: none"> ・特徴のあるリズムを2・3提示する。(トロムコ トントン、ゾンゾン、トンカコ カッカコ) ・いかにも音が出ているかのように表現させる。 ・口伴奏も取り入れて。 ・役割をきめてにぎやかに。
3	今日は私たちが神様だノ	30×1	<ul style="list-style-type: none"> ・つぎつぎにいろいろな神様に変身して踊る ・自分たちの神様の踊りをつくって踊る 	<ul style="list-style-type: none"> ・風の神様、火の神様、山の神様、太陽の神様、海の神様、畑の神様などイメージを広げさせる。 ・1・2時間めの動き・リズムを生かし、自分たちの動きをみつけさせる。

Ⅲ 高学年の単元計画例

- (1) 題材・・・『秋だ、神楽だ、高千穂だ』
 (2) ねらい・・・夜神楽のようすや感じをくわしくとらえ、クラス作品にまとめる。
 (3) 時間・・・7時間

<表2>

No.	課題	時間	学習内容	指導のポイント
1	夜神楽のスケッチをしよう	40×1	夜神楽のイメージをいっぱい出しあってつぎつぎ動く	・特徴のあるからだの使い方、動き、リズム、持ち物などから、精一杯動けるもの、おもしろそうな動きを引き出す。
2	(1) 剣の舞い	40×1	白刃をもって「切る」－「小さく・大きく回る」	・『岩潜(いわくぐり)』の勇壮な感じを個人を主体に表現させる(全身で、空中で、低い姿勢で)
3	(2) 天岩戸を探そう	40×1	「暗闇を探す」－「ここだ、重い岩戸を開けろ」	・『手力雄(たちからお)』『戸取(ととり)』の「手力雄命」になりきらせ、特徴のある動きで。(走る一首を動かして見る、力をあわせて開ける×「個・群」)
4	(3) 神楽せりの再現だ!	40×1	「にらみ合い」－「かけ合い」－「そして衝突だ!」	・静から動へ、変化のある表現をグループでさせる。 ・ヨイヨイサッサ ヨイサッサと声を出させかけ合わせる。 ・小群と小群から次第に2群の大きな対立へつなげる。
5	(4) リズムにのってトロムコ トン トン トロムコ トン	40×1	「トン カコ カッカコ カッカコ カズン」(基本のリズム)－「ゾン ゾン ゾン」(細かい足の運び・急調)－「トンカコ カッカコ」(拝むように静かに)－「トロムコ トン トン トロムコ トン」(力強く足を踏む)	・神楽のリズムにあわせ、簡単な神楽の動きを使って。 ・身体をたたいたり、手づくりの楽器の音と対応させて。
6 7	作品をつくらう	40×2	(1)～(4)をつなげて踊る	・個と群を組み合わせる。 ・群の変化、動きの強弱を生かして提示する。

☆ 後に2～3時間の学年の合同練習を行い運動会の発表につなぐ。

(文責 高橋るみ子)

注・文献

<注>

- 1), 2), 3), 4) 松本千代栄 『こどもと教師でひらく表現の世界』 大修館書店 1985
 5) 高千穂夜神楽に関するアンケートの質問項目

1. 夜神楽を見たことがありますか、ありませんか。どこで見ましたか。
2. 今年夜神楽を見に行きましたか、まだ行ってませんか。
 どうして見に行ったのですか、行かなかったのですか。
3. 夜神楽はおもしろいですか、つまらないですか。
 どんなところがおもしろいですか、つまらないですか。
4. 高千穂夜神楽は有名だと思いますか、思いませんか。
 またそれはどうしてだと思いますか。
5. 観光客が神楽を見に来ますがもっと大勢来たほうがいいですか、来ないほうがいいですか。
 それはなぜですか。
6. 夜神楽を舞ったことがありますか、ありませんか。
7. 将来夜神楽を舞いたいですか、舞いたくないですか。
 それはなぜですか。
8. 夜神楽は何のために舞われると思いますか。
9. 夜神楽はずっと高千穂に残ると思いますか、思いませんか。
 またそれはどうしてですか。
10. 夜神楽を変えたいという考えや、こうなったらいいなという願いがありますか。具体的に書いてください。
11. 去年高千穂で「ROCK FRONT-天・地・水-」がありました。知っていましたか、知りませんでしたか。
12. 「ROCK FRONT-天・地・水-」を見に行きましたか。あるいは参加しましたか。
13. 「ROCK FRONT-天・地・水-」について感じたこと、思っていることがあったら書いてください。

- 6) 宮崎日日新聞 1990.9.24 掲載
 7) 高千穂町役場での聞き取り調査より
 8) 後藤俊彦・武田憲一 『高千穂夜神楽』 鉾脈社 1983
 9) 高千穂町教育委員会編 『高千穂の夜神楽』 1987

<その他の参考文献>

- 1) 宮崎県高千穂町編 『高千穂町史』 1943
- 2) 小手川善次郎 『高千穂神楽』 小手川善次郎遺稿出版会 1976
- 3) 人文社観光と旅編集部編 『郷土資料事典 宮崎県・観光と旅』 人文社 1988
- 4) 後藤俊彦 『日向高千穂神の国』 高千穂神社奉参会 1991
- 5) 朝倉治彦他編 『神話伝説辞典』 東京堂出版 1963
- 6) 芸能史研究社編著 『日本の古典芸能 第一巻 神楽』 平凡社 1969
- 7) 大塚民族学会編 『日本民族辞典』 弘文堂 1972
- 8) 日本風俗史学会編 『日本風俗史事典』 弘文堂 1979
- 9) 蘆原英了 『舞踊と身体』 新宿書房 1986
- 10) 市川雅 『舞踊のコスモロジー』 勁草書房 1983